

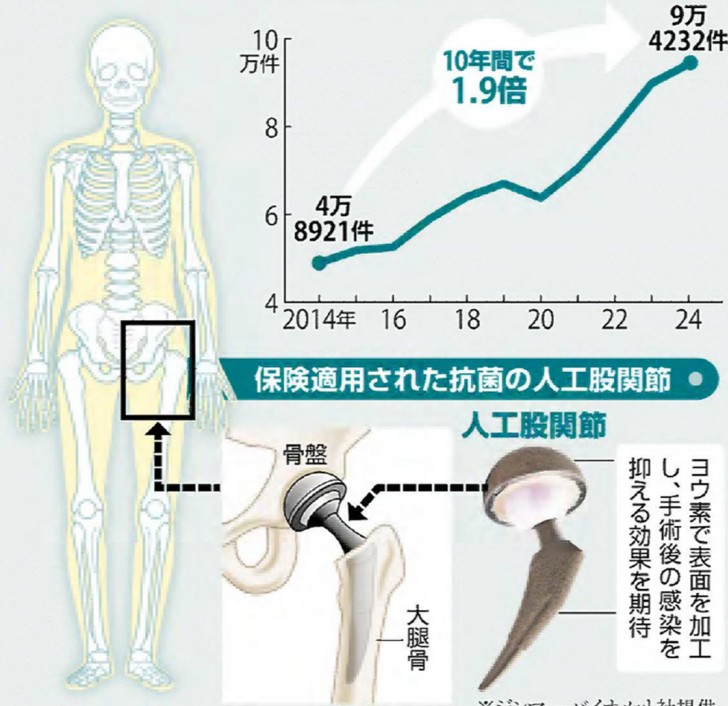
進化する人工股関節

人工股関節が必要となる主な原因

- **変形性股関節症**
股関節の軟骨がすり減り、関節内で炎症が起きる
- **関節リウマチ**
免疫が誤って関節周辺を攻撃し、痛みや変形が生じる
- **大腿骨頭壊死症**
血流が悪くなり、大腿骨の先端がもろくなる
- **外傷**
骨折や脱臼の後遺症として関節疾患になる



置換手術は年々増えている



保険適用された抗菌の人工股関節



※ジンマー・バイオメツ社提供

早期にリハビリ



作図 デザイン部 遠藤敦子

股関節は体を支え、動かすための重要な役割を果たしています。傷んで改善が見込めないときは、人工的な関節に置き換えることも選択肢となります。抗菌作用をもつ新たな人工股関節が昨年11月、公的医療保険が適用され、感染予防の効果が期待されます。

(森井雄一)

軟骨すり減り炎症
両脚の付け根にある股関節は、大腿骨(太ももの骨)の先端を骨盤のくぼみが包み込む構造をしており、間に緩衝材となる軟骨が挟まっています。立つ、歩く、座るなどの日常動作のほか、脚を広げたり、回したりするときにも使います。股関節に痛みをもたらす主な原因として、軟骨がすり減って炎症が起る「変

人工股関節の新治療

「変形性股関節症」が挙げられます。免疫が誤って自分の関節を攻撃する関節リウマチや、外傷の後遺症によっても生じます。悪化すると、じっとしていても痛みが出るようになります。

まずは、股関節周辺の筋力を鍛えて症状を和らげたり、痛み止めや炎症を抑える薬で対処したりします。症状が進行し、痛みが続くようなときは人工股関節も選択肢に入ります。

置換手術、年々増加
人工股関節は、金属などでできた人工的な関節を、骨盤と大腿骨の両方に埋め込むものです。横浜栄共済

病院(横浜市)で整形外科統括部長を務める白井孝治さんは「かつては『最後の手段』として主に70歳代以降に使われていましたが、近年は耐久性も上がり、50歳代以前で使うことも増えています」と言います。置換手術の件数は、2024年に年間9万4232件となり、10年前の4万8921件から1・9倍になりました。

人工股関節を使うと痛みがなくなることが期待されます。早ければ手術から2〜3週間で退院できます。ただ、手術に伴う細菌感染のリスクがあり、患者の1〜2%で生じると推定され

ます。人工関節の表面に細菌が付くと取り除くのが難しく、感染部位の洗浄で症状が治まらないと、埋めた股関節を取り出す必要があります。感染が広がると、命に関わる敗血症になるリスクもあります。

白井さんが開発し、米国のジンマー・バイオメツ社が製品化した人工股関節は、表面を抗菌作用のあるヨウ素で加工することで、こうした感染を抑えることが期待されています。

同病院で、骨髄炎を経験した70歳代の女性にこの人工股関節を使ったところ、感染を起こさずに歩けるようになりました。骨髄炎を起

こす菌は長く体内に潜んでいることが多く、再感染を起こす恐れがあるため、女性はいくつかの病院で人工股関節の置換手術を断られてきたといいます。

山口大整形外科教授の坂井孝司さんは「免疫抑制剤を使う人や糖尿病の患者など、感染リスクの高い人にも使いやすくなります」と語ります。ジンマー社によると、6月末時点で全国約260病院で扱っており、2500件以上使われました。来年には、希望する病院すべてで取り扱えるようになると見込まれます。

人工股関節の手術後は早期にリハビリを始めます。ベッドで上半身を起こすことや、歩行器を使って歩く練習などを行い、できるだけ早く元の生活に戻れることを目指します。